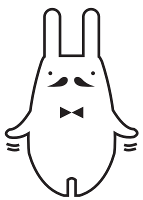
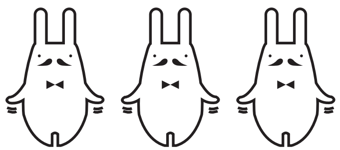
一緒に踊ろうあのヒゲダンス

twnovel おりほん
2
〜バカ編〜



懐かしき古きあの曲流れたら
一緒に踊ろうあのヒゲダンス



この内容は、suwazo が 2010 年 2 月〜 2013 年 3 月にかけて twitter で呟いた twnovel（※140 文字、ただしタグを除けば 131 文字の小説）のうちのバカ系 11 本に、新作を 1 本加えたものです。
suwazo@twitter
2013 年 3 月

スイカ畑で丸まっていたら、農家のオッサンに収穫されてしまった。よく見ろよオッサン。そのまま市場を経由してスーパーに並べられた。誰か気づけよ。通りかかる主婦達がぺちぺちと頭を叩いてゆく。なぜ誰も俺を選ばない。そんなにダメな音か？　ちょっとヘコむ。誰か俺を買え。

パンダの毛を剃ってみたらまさかのブタが現れた。「皆様いい夢を見られましたでしょうか、これにてショーは終幕です」ブタは優雅に一礼し、自らブタ小屋へ去ってゆく。その目に光るものがあった。「ブラヴォー！」僕は声を張り上げた。そしていつまでもいつまでも拍手し続けた。

ペットショップでミニチュアアントワネットを買ってきた。ミニチュアなので育ってもせいぜい 30 センチ程である。餌はケーキ。綺麗なドレスや小石をあげると喜んで踊る。かまってやらないとすねて部屋を汚す。散歩に行くと、よそのアントワネットとよく喧嘩する。たまに吠える。

仕事中、唐突に指から指が生えてきた。どんどん伸びて枝分かれして、葉っぱまで広げだした。仕方ないので屋上に避難し、初夏の眩しい陽光を浴びて光合成でもすることにした。昼休み、後輩の女の子がやってきて、何百もに増えた枝先の爪の一つ一つにピンクのネイルを塗ってくれた。

ツッコミがいた。神はツッコミの肋骨からボケをつくった。あるときボケは、決して開けてはならないと言われていた箱を開けた。箱の中にあったあらゆる災厄は世界中に飛び散ってしまったが、最後にただ一つ残ったものがあった。ハリセン。「何してんねーん」ツッコミが炸裂した。

仲の良いボケとツッコミがいた。あるときボケは毒蛇に噛まれて死ぬ。悲しんだツッコミは冥府へと向かった。二人の漫才に大ウケした冥府の王はボケが地上に戻ることを許す。「ただし、道中、決してツッコんではならぬ」地上までの長い暗い道、際限なくボケはボケ続け、ツッコミはつい

『誰か拾って下さい』雨の夜、捨て脳を見つけた。脳は段ボール箱の中からみゅうみゅうと寂しげに電波を発していた。帰宅し、パンツ一丁でだらしなく寝ている弟の脳を引っ張り出して、代わりに拾ってきた脳を入れる。弟（の体）は正座して、「有難うございます」と頭を下げた。

混沌の中に生まれた神は、不眠不休の作業で世界を（空と大地と海を、あらゆる生物を）創造した。さすがに疲れを感じて「しばらく休むぞ」と執事に告げる。「それがよろしいでしょう」執事が頷く。眠りにつく寸前に神は思う、ところで世界をつくる前から傍にいたこの執事は何者だ？

引越業者を頼んだら牛車が来た。ありえない。しかも平安貴族が乗るような豪華なやつ。冷蔵庫とか積めるのかよ。「すいません、牛一頭しかいなくて」数じゃねえ。「モー」黙れ牛。とにかく荷物を積んで出発したものの、「猫の死体があるので方向変えます」だから平安貴族じゃねぇ。

庭の置き石をひっくり返したら虫がいた。「おい眩しいだろボケ」怒られた。慌てて石を戻そうとしたら、「待て適当に置くな俺を潰す気かボケ」また怒られた。仕方なく石を向こうに放ると、「あれ俺ん家だぞボケ！」また怒られた。「気遣いってもんを知らんのかボケ」うるせえよ虫。

長年の夢であった人間椅子を買いにきた。会場にずらりと並ぶ椅子、椅子。どれもくらくらするほど素晴らしい。店員を呼び止め「中の人間も見たいんだけど」と言うと失笑された。「中にどんな人間がいるかわからない、そこが人間椅子のロマンですわよ？」見知らぬマダムに諭された。

ステキ宇宙人が現れた。何しろ「我ハ・ステキ宇宙人ダ」と名乗るのだからそうなんだろう。ステキ宇宙人は腹を空かせていたので、コンビニに連れて行ってみた。「食べられるもの、ある？」それから、昼下がりの河辺に並んで座り、私はサンドイッチを、ステキ宇宙人は乾電池を食べた。